

やませ地帯における半促成栽培イチゴの据え置き株の収量・品質

岩瀬利己・木村一哉

(青森県農林総合研究センター畑作園芸試験場)

Yield and Quality of Re-used Strawberries after Semi-Forcing Culture in 'Yamase' Area

Toshimi IWASE and Kazuya KIMURA

(Aomori Prefectural Agriculture and Forestry Research Center, Field Crops and Horticulture Experiment Station)

1 はじめに

国産イチゴの生産は、7月から10月までの夏秋期が端境期である。しかし、この時期にもケーキ用・業務用として一定の需要があり、アメリカ等の国外からの輸入品に頼っている。一方、青森県のやませ地帯は、夏期冷涼な気象特性を有することから、暑さを嫌う夏秋どりイチゴ栽培にとって有利である。

そこで、主要な一季成り性品種について、半促成栽培で収穫した株をそのまま植え替えせずに据え置き栽培したところ、夏秋期以降も引き続き収穫が可能であったので、品種別の収量・品質等について報告する。

2 試験方法

2002年の秋、青森県農林総合研究センター畑作園芸試験場のビニールハウスに、「麗紅」、「とちおとめ」、「さちのか」、「濃姫」、「アスカルビー」、「女峰」の6品種を定植し、半促成栽培を行った。「濃姫」と「アスカルビー」は10月4日、その他の品種は9月4日に、畦幅100cm、株間18cmとし、2条植えた。施肥量は、窒素4kg/a、りん酸3kg/a、加里4kg/a、堆肥500kg/a、苦土炭カル10kg/a、

a、苦土重焼燐10kg/aである。

半促成栽培としての管理や収穫は2003年6月下旬まで行い、6月中下旬に1株あたり2~3芽を残して古葉とランナーを摘除し、ダイオネット810SG（遮光率55%）でハウス全体を外側から被覆して遮光し、引き続き生育、収量、品質等を調査した。遮光期間は9月中旬までとし、10月以降は積極的に保温し、冬春期は半促成栽培に準じて保温管理した。2003年11月下旬と2004年3月上旬に大規模な株の手入れを行い、その他の時期にも随時古葉とランナーを摘除した。

3 試験結果及び考察

(1) 最初の全体的な株の手入れ後である7月上旬の生育は、全品種とも草丈・葉柄長が長く過繁茂状態であった。出蕾中の花房を伴った芽は摘除しなかったため、株当たりの芽数は2.2~2.5であり、全品種とも、出蕾中、開花中及び収穫中の花房を有していた。

秋以降には草丈・葉柄長とも短くなった。11月上旬以降にまず、「アスカルビー」、「さちのか」、「麗紅」が矮化し始め、順次他の品種も矮化した。

芽数は全期間を通じて、「さちのか」と「女峰」が多く、「とちおとめ」と「濃姫」がやや少なかった（表1）。

表1 越年株の手入れ後の生育

調査 時期	品 種	草 丈 (cm)	第3葉の生育(cm)			芽 数 (芽/株)	果房の有無		
			葉柄長	頂小葉			出蕾 花房	開花 花房	収穫 果房
				長さ	幅				
7/3	麗紅	48.0	28.5	14.5	7.9	2.2	有	有	有
	とちおとめ	45.6	28.7	13.1	9.3	2.5	有	有	有
	さちのか	41.7	24.3	11.7	6.5	2.5	有	有	有
	濃姫	44.9	28.4	14.1	7.2	2.3	有	有	有
	アスカルビー	46.9	29.2	13.9	7.4	2.3	有	有	有
	女峰	48.0	29.3	14.2	7.4	2.3	有	有	有
11/7	麗紅	34.6	18.8	11.1	6.0	4.0	無	無	有
	とちおとめ	42.0	23.5	13.9	6.7	3.7	有	無	有
	さちのか	33.3	17.6	12.2	6.5	5.2	有	無	有
	濃姫	39.9	20.9	14.2	5.9	3.7	有	有	有
	アスカルビー	30.3	16.5	10.8	7.0	4.3	有	無	有
	女峰	39.6	22.2	13.6	6.2	4.7	有	無	有
12/3	麗紅	26.8	8.8	6.4	4.8	4.0	有	有	無
	とちおとめ	35.1	11.2	8.4	5.4	3.7	有	有	無
	さちのか	27.2	9.5	7.7	5.2	5.2	有	有	有
	濃姫	29.0	9.5	8.4	5.4	3.7	有	有	有
	アスカルビー	26.5	8.6	7.7	6.4	4.3	有	有	有
	女峰	30.8	8.0	6.9	4.9	4.7	有	有	有

(2) 7月から10月までの夏秋期の商品果収量は、「さちのか」が株当たり219gで最も多く、次いで「とちおとめ」が198g、「アスカルビー」が185g、「女峰」が184gであった（表2）。夏秋期では、「濃姫」が8月から9月、「とちおとめ」が9月後半から11月にかけて、それぞれ収穫が一時的に途切れたが、その他の品種では細々ながら収穫が途切れなかった。特に、「さちのか」は連続出蕾傾

向が強かった。

(3) 11月から2月までの冬期の商品果収量は、「さちのか」が株当たり252gで最も多く、次いで「濃姫」が161g、「アスカルビー」が123gであった。この期間は気温が5℃以下に下がることが多く、促成栽培に準じた積極的な加温管理が必要であると考えられた。

(4) 3月から6月15日までの2シーズン目の春期の商品果

表2 据え置き栽培における夏秋期の収量・品質

品 種	月別商品果収量 (g/株)					平均 1果重 (g/果)	Brix (%)
	7月	8月	9月	10月	合 計		
麗紅	82.2	25.7	16.0	21.8	145.7	8.1	10.6
とちおとめ	141.8	43.8	12.0	0.0	197.6	9.9	9.5
さちのか	164.3	20.0	19.0	16.0	219.3	8.8	10.9
濃姫	105.0	0.0	3.8	34.2	143.0	10.5	9.1
アスカルビー	130.0	19.6	17.8	17.8	185.2	9.9	11.2
女峰	125.7	15.0	22.3	21.2	184.2	7.2	9.8

注) 商品果収量、平均1果重、Brixは7月から10月までの夏秋期収穫分

収量は、‘濃姫’が株当たり756gで最も多く、次いで‘さちのか’が689g、‘とちおとめ’が614g、‘麗紅’が523gであった(図1)。

(5) 2002年秋に定植した株では、2003年3月から収穫が始まり、2004年6月15日までの株当たりの商品果収量の合計は、‘さちのか’が1508gと最も多く、次いで、‘とちおとめ’が1209g、‘濃姫’が1172g、‘麗紅’が1100g、‘女峰’が965g、‘アスカルビー’が889gであった(図1)。

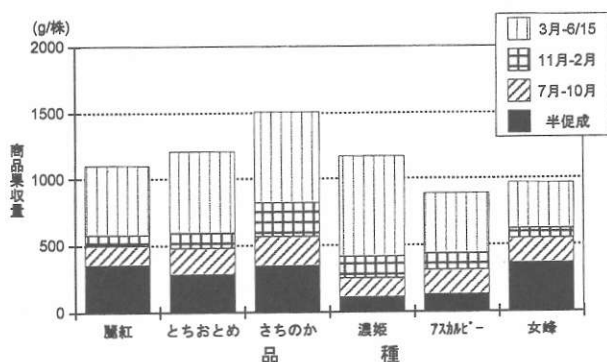


図1 全期間の商品果収量 (2003年～2004年)

(6) 夏秋期の商品果の平均1果重は、‘濃姫’、‘とちおとめ’、‘アスカルビー’が10g以上でやや重く、‘麗紅’と‘さちのか’は9～10g、‘女峰’が7～8gでやや軽かった(図2)。しかし、全収穫期間で比較すると、品種間差は非常に小さく、‘濃姫’がやや重く、‘女峰’がやや軽かった。

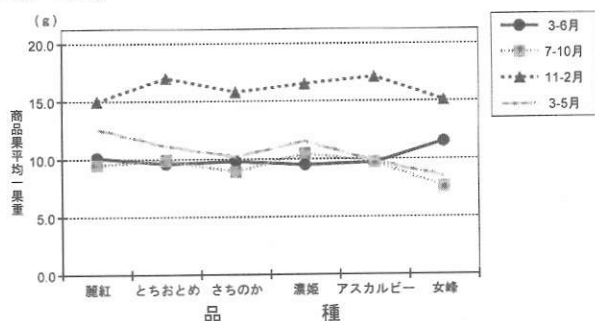


図2 時期別の平均1果重の推移

(7) 7～8月に収穫された果実のBrix糖度は、‘さちのか’と‘とちおとめ’が10%程度とやや高く、‘アスカルビー’が8.7%とやや低かった(図3)。10月に収穫され

た果実のBrix糖度は、‘アスカルビー’、‘さちのか’、‘麗紅’が10.6以上でやや高く、‘濃姫’と‘とちおとめ’と‘女峰’がやや低かった。全収穫期間で比較すると、品種間差は非常に小さいが、‘さちのか’が最も高く、‘女峰’、‘アスカルビー’、‘濃姫’がやや低かった。

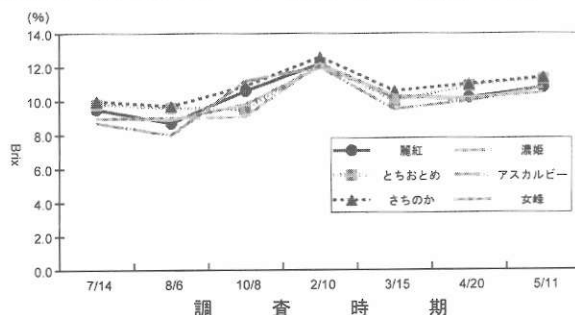


図3 時期別のBrixの推移

(8) 夏秋期に収穫された果実の日持ち性は、‘さちのか’が最も高く、次いで、‘とちおとめ’、‘アスカルビー’がやや高かったが、‘女峰’、‘麗紅’、‘濃姫’は柔らかくて日持ち性が低く、1日以内に自重でつぶれた。

(9) 以上の結果、夏秋期の収量性・品質には品種間差異が認められた。夏秋どりも含めた周年どりには、夏秋期の商品果収量が最も多く、冬春期にも収量が多く、さらに、Brix糖度が高く日持ち性の良い‘さちのか’が最も有望と考えられた。

4 まとめ

半促成栽培に供した越年株を、6月に2芽程度に整理し、1芽当たり4～5枚に摘葉し、ランナーを摘除する等の手入れを行い、6月中旬から9月中旬までハウス全体を遮光して管理し、据え置き栽培することによって、6月下旬以降も収穫が可能で、7月からの夏秋期、及びそれに続く冬春期にも連続して収穫が可能であった。品種では、‘さちのか’が最も適すると考えられた。